

枕草子回想段について

— 定子の美をとおして —

伊 原 昭

枕草子の日記的部分、つまり回想の章段には、主家の非運にふれたの暗い面の描写がまったくと云ってよい程見られない。このような現実との相連をどう考えたらよいのか、何故そうであるのか、古来から諸説があるが、まだこの疑念は解明されていない。

これについて、枕草子は特に作者がきわめて鋭敏な感覚の持主であり、それが特徴ともなっている作品であるので、作者の特性を充分生かすことのできた視覚的な描写による定子の容姿をとおして、問題点のごく一端を探ってみたい。

中関白家の栄耀から没落へと、急変していった運命をそのままに負い、光輝から暗澹へと転じ、悲境のうちに崩じた定子の生涯は、輝きに溢れた時代を経験した方であっただけに、一層悲惨であり、悲劇の人と言わざるを得ない。

作者の宮仕えの期間は、里居の間を除いても、定子の逆境の時期の方がはるかに長い。それは作品に描かれている章段の量から言っても同様である。日記的部分は、**盛時** 二三・三五・八一・八二・九〇・九四・九五・一〇一・一〇四・一二八・一二九・一三八・一八四・二〇二・二七八・三〇一・三二三段。**悲境** ①道隆薨後八三

枕草子回想段について — 定子の美をとおして —

・一〇二・一〇八・一三三・一三五・一六一・三〇八・三一九第一項 ②伊周・隆家左遷、定子落飾、貴子薨去五六・九三・一〇三後半・一四三・一六二・二七七・三一九第二項 ③伊周・隆家赦免、定子入内（密儀か）、彰子入内八・九・四九後半・七八・八四・八六・八七・九九・一〇〇・一〇三前半・一〇六・一三六・一三七・二三九・二四五・二七三・二七四・二七五・二九二段。であり、もとより諸説があつて決定はできないが、一往これ注1によつてみてもそれが知られるであろう。このように作者は悲境における期間に長く仕え、その場の定子は熟知している筈である。それなのに何故そのいたましく暗い姿にふれなかつたのであろうか。

定子の生涯は、現実においてどのようなものであつたか。一往歴史物語として栄花注2に記載されているところをみると次のようである。「さまぐ」のよろこび」「みはてぬゆめ」の三・四の巻々の、入内（上一一九頁）道隆攝政（上一二二頁）立后（上一二三頁）中姫君東宮妃（上一三八頁）伊周内大臣（上一四〇頁）内大臣伊周内覧の宣旨（上一四四頁）などの明るい敏びに満ちた幸運の時代の、「内には中宮並びなき様にておはします」（上一四四頁）という一

條天皇の寵愛も深い幸福な生活は、長徳元年四月十日の道隆薨去により一転して暗い不幸な道へ進んで行く。道隆薨去(上一四四頁)道兼関白(上一四七頁)道兼薨去(上一四九頁)道長内覧の宣旨(上一五二頁)道長右大臣(上一五二頁)これらの折の定子は、「中宮世中をあはれにおぼし歎きて、里にのみおはします。されど、さてのみやはとて參らせ給ぬ。みかどいとあはれにおぼしめしたり。」(上一五三頁)「中宮は、「年頃かゝる事やほありける。故とのゝ一所おはせぬけにこそはあめれ」と、あはれにのみおぼさる。」(上一五五頁)のように記されている。その後も、伊周・隆家が花山院を射奉ったということ(上一五六頁)不法発覺(上一五六頁)道隆一周忌(上一五七頁)などで、「所々」に御衣の色かはり、あるは薄鈍などにておはするも、あはれなり。」(上一五七頁)のような喪服の様子も記されている。定子懷妊(上一五八頁)。更に「浦々」の別れの五の巻にも、伊周・隆家配流(上一六六頁)がありその折の伊周は喪服姿で描かれている(上一六七・八頁)。伊周・隆家の配流により、「宮は御缺して御手づから尼にならせ給ぬ。」(上一六九頁)のように薙髪される。隆家の大江山よりの文を見て「宮には、あはれに悲しうよろづをおぼし懸はせ給て、物も覚えさせ給はず。」(上一七〇頁)のように嘆き悲しまれる。その後も「宮にはつきもせぬことを覺し歎くに、御腹も高く成もていき、たゞならぬ事のみおぼし知らるゝにも悲しうなむ。」(上一七二頁)のように悲嘆が続く、さらに母貴子が心痛のあまり病に臥し伊周等を泣き恋うことを知って伊周が配所をのがれて入京、それが發覺して更に筑紫に配流となり(上一七五頁)、遂に貴子十月二十日余り

に逝去(上一七九頁)、十二月二十日脩子内親王誕生(上一八〇頁)と続き、その折も皇女誕生によって今更ながら父道隆母貴子の亡いこと、兄弟の配流という非運を悲しまれる。尼姿の定子を始め誰もが「御衣の色より始、誰もうたてある御姿共に」(上一八〇頁)のように喪服のいとわしい姿であることも記されている。貴子に先だたれた定子の祖父高二位成忠が内親王に會われた際も定子は、「宮の御前哀に御覽じて、さくりもよくと泣かせ給。」(上一八三頁)のように聲をあげて泣かれた。その後、中宮と内親王參内(上一八四頁)、職の御曹司から清涼殿のそばへ移られるなど一條天皇の御寵愛は格別である(上一八六頁)。その後、懷妊(上一八六頁)敦康親王誕生(上一八八頁)、そのよこごびのため、伊周・隆家召還の宣旨が下る(上一九〇頁)、高二位成忠の薨去(上一九四頁)などあり、伊周に会えば会ったで様々の思いに、「宮の御前、一重の御衣の袖もしぼるばかりにておはします。」(上一九五頁)「故上の御事を返々聞えさせ給つゝ、誰もいみじう泣かせ給。」(上一九五頁)と悲しまれる。次の「かざやく藤壺」の巻の六には、道長の女彰子が入内して(上一九九頁)華やかな色どりに宮廷は包まれ、君寵も厚く、藤壺に住み、中宮と称しそれにつれて定子は皇后と称せられる(上一二〇六頁)。その後、定子懷妊(上一二〇六頁)、里邸に退出される際、一條天皇に悲しいことばかり申し上げ幾重もの袖のおる程泣かれる。その後も食もとおらず夜晝涙に浮き上るばかり悲しまれる(上一二〇六・七頁)。不吉な事を予想されて親王の後見を妹の四の君に託され、「……うち啼てその給はせける。」(上一二〇九頁)のように、また「月日過行まゝに、皇后宮はいとゞ物をの

みおぼし歎くべし。」(上二一〇頁)のように悲歎に沈み、遂に「とりべ野」の七の巻で、「かくて八月ばかりになれば、皇后宮にはいと物心細くおぼされて、明暮は御涙にひちて、あはれにて過ぎせ給。……いと昔のみおぼされてながめさせ給ふ。」(上二一三頁)とあり、長保二年十二月十五日に嬖子内親王誕生(上二一五頁)十六日に崩御(上二一六頁)。「日頃物をいと心細しと思はしめしたりつる御けしきもいかにと見奉りつれど、いとかくまでは思ひきこえさせざりつる。……」(上二一六頁)のように、定子の心情を兄弟が語っている。この巻には清少納言のことが「内わたりには五節・臨時の祭などうち続き、今めかしければ、それにつけても昔忘れぬさべき君達など参りつゝ、女房達ども物語しつゝ、五節の所々有様など言ひ語るにつけても、清少納言など出であひて、少々の若き人などにも勝りておかしう誇りかなるけはひを、猶捨て難くおぼえて、二、三人づつれてぞ常に参る。」(上二一四頁)のように記されている。

このように栄花物語をとおしての定子は、父・母・祖父等の死、兄弟の罪等々の出来事をそのままの、悲傷、悲痛の涙に沈む暗い生涯を送られ、いわば政権を背景にした苛酷な運命にてもあそばれた悲劇の人であった。ただ一條天皇が憚りながらも変らない深い愛情をそそがれたことが唯一のすくいであり、なぐさめであろう。

このような暗澹とした世界に描かれている定子が、枕草子に姿を見せる時は、一転してまったく対蹠的な、華やかな明るさで現出する。

枕草子に見られる定子は、どのような場面にも、涙を見せ悲歎に

枕草子回想段について 一定子の美をとおして

沈まれることはなく、明るく、「笑はせ給ふ」といった表現が多い。特に小稿で探ろうとするその容姿は、次の諸例のみであり、それは、目もあやな光輝に溢れためでたい美の像として描かれている。

宮にはじめてまゐりたるころ、……いとつめたきころなれば、さし出でさせ給へる御手のはつかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、かぎりなくめでたしと、見知らぬ里人心地には、かかる人こそは世におはしましけれと、おどろかるるまでにぞまもりまらする。(一八四段 二二九頁)

作者が、これ程の方がこの世にいらつしやるのだった、とただ目も覚めるような驚嘆の心で見つめ見守っている、という程の定子の美しさが、僅かに見える手のほんのり紫がかつたうす紅の、つややかな色合によつて描かれ、その美に「かぎりなくめでたし」のような最高の讃辭を呈している。さらに、

宮は、しろき御衣どもにくれなるの唐綾をぞ上にたてまつりたる。御髪のかからせ給へるなど、繪にかきたるをこそかかるとは見しに、うつつにはまた知らぬを、夢の心地ぞする。(同段 二三一頁)

のように、下に白上に紅の衣裳、それに髪の色が配せられたあざやかな対照的な色調の容姿を捉え、繪に畫いてあるのをこそこうした事は見ただけれど、現実^にこのような美しさはまだ見たこともない。ただもう夢を見ているような気持がする、と口をきわめて讃嘆している。「この段は、作者が出仕し始めた頃で、中関白家の盛時であるの言うまでもない。」

関白殿、二月廿一日に法興院の積善寺といふ御堂にて一切經供養せさせ給ふに、女院もおはしますべければ、二月一日のほどに、二條の宮へ出でさせ給ふ。……御前よりはじめて、紅梅の濃き、薄き織物、固紋・無紋などを、あるかぎり着たれば、ただ光り満ちて見ゆ。唐衣は、萌黄・柳・紅梅などもあり。(二七八段 二八五頁)

「御前よりはじめて」とあるように、定子もその他の方々も、すべて紅梅の濃・淡の織物の衣裳を着用しており、その美しさは、あたり一帯が光り輝いているように見えると述べている。

御文は、……「あなたにまかりて、祿のこともし侍らん」とて立たせ給ひぬるのちぞ、御文御覽する。御返し、紅梅の薄様に書かせ給ふが、御衣のおなじ色にほひ通ひたる、なほ、かくしもおしはかりまゐらする人はなくやあらんとぞくちをしき。今日のことはことさらにとて、殿の御方より祿は出ださせ給ふ。女の装束に紅梅の細長添へたり。(同段 二八六・七頁)

天皇よりの御文を御覽になつて、その御返事を紅梅色の色紙にお書きになる、それがお召物の同じ色に映じ合っている。その互に映発しあう美しさを、これ程に推量できる人は自分の他にはないだろうと思うと残念である、と述べ、他の人達には到底わからないであろう、と思う程の自身の繊細な高度の美的感覺と同様のものを定子が持つておられることを示し、衣裳、色紙の、紅梅色が相映発しあう配色による容姿の無上の美を自負しながら認めている。さらにその御文の使者にかづける衣裳も紅梅の細長であると言う。このような同色の何気ないとりあわせの、鋭敏なセンスを持つ者のみを知る美

の世界に定子が描かれている。

おはしまし着きたれば、……まだ御裳・唐の御衣たてまつりながらおはしますぞいみじき。くれなるの御衣どもよろしからんや。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重がさねの織物に赤色の唐の御衣、地摺の唐の薄物に、象眼重ねたる御裳などたてまつりて、ものの色などは、さらになべてのに似るべきやうもなし。「我をばいが見る」と仰せらる。「いみじうなんさぶらひつる」なども、言に出でては世のつねのみこそ。……いとあきらかに、はれたる所は、いますこしぞげざやかにめでたき。御額あげさせ給へりける御釵子に、分け目の御髪の色さか寄りてしるく見えさせ給ふさへぞ、聞えんかたなき。(同段 二九五〜二九七頁)

紅の御衣が並一通りであろうか、中に唐綾の柳製の召物、葡萄染の五重がさねの織物に赤色の唐衣、地摺の唐の薄絹に象眼をかさねてある裳などを召していらつしやる、それらの色はまったく一般のものに似ていようはずもない。このように格別すぐれた様々の色の衣裳を着用している容姿が描かれ、定子が、今日のこの私の様子をどう思つてみたか、と少納言に問われる。少納言は、たいそうお立派で素晴らしうございました、などと申し上げても言葉に出してはもう世間並でしかない、口に出して表現できない程の美しさであるという。「聞えんかたなき」という程の美しさ、そして定子自身が「我をばいが見る」と作者に問いかける程の自信にみちた姿は、華麗な色合の衣裳、髪に釵子をさされた豪華な晴の装束であった。なお、作者自身の姿も、「赤色に櫻の五重の衣を御覽じて」(同段 二九八頁)とあり、それにかかわる問答を、「一事としてめ

でたからぬことぞなきや。」と記し、その場の雰囲気のかに明るく素晴らしいかを簡明にあらわしている。「この段は、正暦五年二月のことで、攝政であった道隆が関白になつてからの、中関白家の最盛時の様子を記し、「またの日、雨の降りたるを、殿は、「これになん、おのが宿世は見え侍りぬる。いかがが御覽ずる」と聞えさせ給へる、御心おごりもことわりなり。」という記述によつてもそれがうかがえるようである。」

淑景舎、東宮にまゐり給ふほどのことなど、いかがめでたからぬことなし。……紅梅の固紋・浮紋の御衣ども、くれなるのうちたる、御衣三重が上にただひき重ねて奉りたる、「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。え着ぬこそくちをしけれ。いまは、紅梅は着でもありぬべしかし。されど、萌黄などのにくければ。くれなるにあはぬか」などのたまはすれど、たたいとぞめでたく見えさせ給ふ。奉る御衣の色ことに、やがて御かたちにはひあはせ給ふぞ、なほことよき人も、かうやおはしますらん、ゆかしき。(一一〇四段 一五九・一六〇頁)

淑景舎のいとうつくしげに、繪にかいたるやうにてゐさせ給へるに、宮はいとやすらかに、いますこしおとなびさせ給へる、御けしきのくれなるの御衣にひかりあはせ給へる、たぐひはいかでかと見えさせ給ふ。(同段 一六一頁)

定子が服色によせるはつきりした考えを持ち、嗜好にあう色、あわない色、季節と服色との関係、配色、それらを述べておられるのを作者はもろさず記している。いわば、そうした衣裳の色合にも、高度な識見を持っておられる定子の、センスと容貌と衣裳とのすべて

枕草子回想段について 一定子の美をおして―

が一つになつて生まれた美の像が描かれている。それは紅梅・紅を主調とするまことに華麗な色調に包まれ、それがそのまま容貌に映発しあつて、「いとぞめでたく見えさせ給ふ」という、素晴らしい美しさであり、特に、衣の紅に顔などの様子が「ひかりあはせ給へる」、その美しさは、どのような人も匹敵できない程のものであると讃えている。この場面における道隆の、わが女定子・原子によせる得意な気持が「御けしきいとしたり顔なり。」(同段一六二頁)とのべられ、さらに伊周・隆家の立派さも加えて、道隆・貴子の「殿をばさるものにて、上の御宿世こそいとめでたけれ。」(同段一六二・三頁)という、運勢の素晴らしさがたたえられている。こうした中関白家の権勢の盛りに、定子の理想的な容姿美を、服色を伴つて目に見るように描き出している。なお、この場面の榮華を讚美するために、登場する人々の容姿を絵画的に描いてみせ、それによつていかに豪華で絢爛としたものであつたかを示している。「この段は長徳元年正月に定子の妹原子が東宮の妃となり、その後二月十日余に、定子に会いに來られた折の記事で、道隆一家の最盛期の輝かしい一場面である。」

上の御局の御簾の前にて、殿上人、日一日零笛吹き、遊びくらし出でたれば、戸のあきたるがあらはなれば、琵琶の御琴をたたきまに持たせ給へり。くれなるの御衣どもの、いふも世のつねなる桂、また、張りたるなどもなどをあまた奉りて、いとくろうつややかなる琵琶に、御袖を打ちかけて、とらへさせ給へるだにめでたきに、そばより、御額の程の、いみじうしろうめでたくけざやか

にて、はづれさせ給へるは、たとふべきかたぞなきや。」(九四段 一四四・五頁)

燈台の光に見える、紅色のお召物の、言葉では言いあらわしようもない程の結構なもの、また光沢を出したものの、それらを何枚も着て大層黒くつやつやとした立派な琵琶に袖をうちかけて持つておられる、それだけでも素晴らしいのに、琵琶のわかから顔のあたりがくつきりと白く見える。その御様子はたとえる方法もないくらい素晴らしい、と述べている。燈火に照らされた衣裳の紅、磨き上げられた名器の黒、お顔の白、その配色による鮮やかな美しさは、作者ほどの才女でも賞讃の言葉もなく、ただ「たとふべきかたぞなきや」と言うだけであった。「この段は、正徳四、五年から長徳元年頃か、作者が出仕して一、二年後の事かとされ、また逆境に到らない年代のことである。」

このように、枕草子の回想章段における、定子の容姿は、いづれも中閨白一家の輝かしい盛時における場面のそれに絞られ、あざやかな白い顔色、ほのかに赤い冬の頃の手、髪の色、といった容貌や、紅を基調とした様々な色合の派手な服色など、絵画的な色彩でいろいろと目もさめるように描き出されており、その美は、「たとふべきかたぞなきや」「かかると世におはしませ給へるを、夢の心地ぞする」「聞えんかたなき」「たぐひはいかで見えさせ給ふ」といった、言語に絶する程の、夢見心地になる程のものであると口をきわめて讃えている。このような、けざやかに、光り満ち、映発するばかりの「めでたき」定子の美の、どこに栄花物語にみら

れる現実の定子像を想像し得ようか。

作者の宮仕えは、前記のように、日記的章段によっても、逆境の時期の方がはるかに長い。その間には「かへる年の二月廿日よ日、宮の職へ出でさせ給ひし、御供にはまゐらで、……おほかた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬうは衣などばかり、あまたあれど、つゆのはえも見えぬに、」(八三段一・一九・一二頁)という、道隆薨後の喪中で、作者が薄鈍の喪服を着用し「おほかた色ことなる頃なれば」とあって、大体が、つまり中宮方の人々は皆服色をあらため喪服を着用しているという場面もあり、ここでも作者は、「暮れぬればまゐりぬ。御前に人々いとおほく」とあって、参上して定子に接している。また、「故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大袂といふことにて 宮の出でさせ給ふべきを、……宮の司の朝所にわたらせ給へり。……わかき人々廿人ばかり、そなたにいきて、階よりたかき屋にのぼりたるを、これより見あぐれば、あるかぎり薄鈍の裳・唐衣、おなじ色の單襲、くれなるの袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそいふまじけれど、空より降りたりにやとぞ見ゆる。」(一六一段 二一四頁)にも、道隆による服喪中の女房達が薄鈍の衣裳によつて描かれ、この際も作者は定子に仕えている。このように、侍女達や作者自身も薄鈍姿でいる間に定子に接していることはたしかである。

こればかりでなく、落飾されたり、さらに母貴子が逝去されるなど、厄としての衣裳の色合や喪による色の姿の定子が作者の目につらぬ筈はない。服喪については、天皇は、本来なら喪に服すべきを、心喪だけで一般人のように服喪しないようであるが、三后・皇

太子は傍葦(傍系の親族で期の喪に服すべきものをいう)を絶するを得ずとあるから、定子も実家の父・母のため喪服を着用したであろう。栄花物語に「所々、に御衣の色かはり、あるは薄鈍などにておはするも」「御衣の色より始、誰もうたてある御姿共に」など喪服の様子が記されていることもその証左となろう。作者が地味な色の尼姿にも、再度にわたる鈍や墨の喪の定子の姿にも接していることは否定できない。

枕草子では、日記的章段(回想)以外の、分類・随筆的章段をみると、作者の感覚に訴える、特に色彩にかかわるような面には、「あてやか」^注1「あはれ」9「あざやか」1「うつくし」1「おどろくし」2「きよげ」2「きよら」2「きらきらし」2「心あるさま」1「心にくし」1「すずしげ」2「たとしへなし」1「なまめかし」4「めでたし」7「めづらし」1「よし」3「をかし」48「あつげ」1「いやしげ」1「うたて」1「つきなし」1「にげなし」1「みぐるし」3「わろし」2「わびし」1などの好悪、美・非美の感情、意識が感じられているようで、この傾向をみると「をかし」を主とする明るい面の美意識が圧倒的であり、暗い面のそれは、「あはれ」を含めても僅少である。そして「あはれなるもの」(一一九段)「物のあはれ知らせ顔なるもの」(八五段)という章段を設けながらも、「男も、女も、わかききよげなるが、いとくろき衣を着たるこそあはれなれ。」(一一九段 一七二頁)という、黒の衣の色合に「あはれ」的な美を感じているくらいで、その他は美にかかわりのない記事のみである。そして、「あはれなるこそをかしけれ」、「あはれにをかし」「をかしくあはれなりしか」など

枕草子回想段について — 定子の美をとおして —

のように、「をかし」と結びつけてきえている。また、「あはれ」を感じる場を、作者は和歌の雰囲気とむすびつけて感じ、作者の立場ではないような態度をみせている場合もある(四〇段 八八・九頁、二二八段 二五七・八頁)。これは、色彩の面からの調査でごく一端にすぎないが、作者は明るく華やいた美を感じ、暗い沈滞した美を殆んど感得しなかったとも言えるようである。そのことは、「かへる年の二月廿日よ日、……めでたくてぞあゆみ出で給へる。櫻の直衣のいみじくはなばなと、裏のつやなど、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだりて、くれなるの色、打ち目など、かがやくばかりぞ見ゆる。しるぎ、薄色など、下にあまたかさなり、せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとにちかうよりの給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これこそとぞ見えたる。……おほかた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬうは衣などばかり、あまたあれど、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば裳も着ず、桂すがたにてゐたるこそ、物ぞこなひにてくちをしけれ。」(八二段一一九〜一二一頁)など、藤原齊信と、自身の姿を描き、齊信の、はなやかな様々の色調の衣裳と、作者の喪の薄鈍を対照的に並べ、一方に「はなばな」「きよら」「かがやくばかり」といった華麗な輝くような美を、片方には「つゆのはえも見えぬ」といった見ばえもしないという非美を感じている、この事例からもそれがはっきり言えるようである。齊信の姿を作者のと比較して「まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これこそとぞ見えたる。」と絶讃している。齊信が美男であり、

のうちに、「をかし」と結びつけてきえている。また、「あはれ」を感じる場を、作者は和歌の雰囲気とむすびつけて感じ、作者の立場ではないような態度をみせている場合もある(四〇段 八八・九頁、二二八段 二五七・八頁)。これは、色彩の面からの調査でごく一端にすぎないが、作者は明るく華やいた美を感じ、暗い沈滞した美を殆んど感得しなかったとも言えるようである。そのことは、「かへる年の二月廿日よ日、……めでたくてぞあゆみ出で給へる。櫻の直衣のいみじくはなばなと、裏のつやなど、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだりて、くれなるの色、打ち目など、かがやくばかりぞ見ゆる。しるぎ、薄色など、下にあまたかさなり、せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし簾のもとにちかうよりの給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これこそとぞ見えたる。……おほかた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍、あはひも見えぬうは衣などばかり、あまたあれど、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば裳も着ず、桂すがたにてゐたるこそ、物ぞこなひにてくちをしけれ。」(八二段一一九〜一二一頁)など、藤原齊信と、自身の姿を描き、齊信の、はなやかな様々の色調の衣裳と、作者の喪の薄鈍を対照的に並べ、一方に「はなばな」「きよら」「かがやくばかり」といった華麗な輝くような美を、片方には「つゆのはえも見えぬ」といった見ばえもしないという非美を感じている、この事例からもそれがはっきり言えるようである。齊信の姿を作者のと比較して「まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これこそとぞ見えたる。」と絶讃している。齊信が美男であり、

作者が盛りをすぎた女であり、自分を卑下しているのはもとよりであらうが、絢爛とした服色と喪の服色に対する非常にはつきりした作者の意識を知ることができる。

「すぎ／＼見ゆる鈍色どもの、黄がちなる今様色など着給ひて、まだありつかぬ御かたはら目、かくてしも、うつくしき子供の心ちして、なまめかしう、をかしげなり。」(柏木 四一三七頁)「入りて見るに、殊更、人にも見せまほしき、様してぞ、おはする。薄き鈍色の綾、中には萱草など、澄みたる色を着て、いと、さ／＼やかに、様体をかしく、今めきたるかたちに、髪は、五重の扇を廣げたるやうに、こちたき末つきなり。……繪にも書かまほし。」(手習五―三九九・四〇〇頁)のような尼姿。「無紋のうへの御衣に、鈍色の御下襲、纓、巻き給へるやつれ姿、花やかなる御よそひよりも、なまめかしさ、まさり給へり。」(葵 一―三五五頁)「鈍たる御衣どもなれど、色あひ・かさなり好ましく、なか／＼見えて、雪の光に、いみじく艶なる御姿を、見いだして、」(朝顔 二―二五八頁)などの喪中の姿。これらの鈍色を主体にした、色とも言えない地味な衣裳に包まれた人々は、「かくてしも」「殊更に」のように格別に、「花やかなる御よそひよりも」平常の美しい色合をかさねた華麗な衣裳よりも、「なか／＼却って、「なまめかし」「をかしげ」「艶なる」といった非常に美しい「繪にも書かまほし」という程の姿であるとしている、これは源氏物語^註であり、こうした例は少なくない。また、「白き御衣に、髪はけづることもし給はで、程経ぬれど、まよふ筋なくうちやられて、日頃に、すこし青み給へるしも、なまめかしさま(さ)りて、眺めいだし給へるまみ・額つ

きの程も、見知らんに見せまほし。」(総角 四―四四九頁)のように、色もない白い衣にけずることもしないでうちやられた髪、少し青みのある顔色、そうした病の折の容貌こそが、平生や晴や、そうした元気の時と比べて、なまめかしさがまさって美しく、風情のわかる人に見せたい程であるとしている。これも源氏物語である。このように、源氏物語では、光源氏を例にとってみても、須磨に謫居している場、桐壺院の崩御、葵の上の死、藤壺の薨去などにおける場など、彼が遭遇する暗い悲傷の場面の、容貌・衣裳の色合による容貌が、そうではない様々な明るい場におけるそれによるよりも、却って一層のすぐれた美が發揮されると述べている。鈍や墨の、最も地味な、色とも言えない服色を、晴や常の、絢爛豪華な、はなやかな衣裳の色合による場合と比較し、それを着用した人物に平常には見られない程の美しさを感じている。それは容貌においても同様であり、心痛や病による蒼白な顔色に元氣な折にはみられぬすぐれた美を見ているのである。このような常套を脱した異常の美を、源氏物語の作者は、常識を熟知し、それをふまえながら意識的に創造しているのであって、それは、「なかなか」という、屈折した心情を示す語を媒体として形象している場合が多い。このような、「なかなか」に據るような意識によって、はじめて人物の、心・身に翳のある場の蒼白な顔色、尼や喪の墨染や鈍色の、まったく明るさ華やかさからは対蹠的な場の姿に美の極致を感じているのであって、これは、異常であり、このような形象は他の作品には殆んどみられない。

枕草子も、このような意味の「なかなか」は僅少であり、視覚的

な容姿の描写などには、「ほそやかなる男の、末濃だちたる袴、
二藍かなにぞ、髪はいかにもいかにも、搔練・山吹など着たるが、
杵のいとつややかなる、とうのもと近う走りたるは、なかなか心に
くく見ゆ。」(二〇三段 二四七頁)の一例しかみられない。枕草
子の作者は、他の一般の作品と同様、源氏物語にみられるような、
いわば「なかなか」的な意識は、少なくとも容姿を描く場合は持つ
ていない、と言つてよい。また、他の面でも一元的であり、直截的
であつたようである。

清少納言の美の意識から探つてみて、定子の順境のはなやかな姿
に美の理想像を求め、そののみを憧憬の対象として生きていたこと
が推察される。紫式部のような、人生の深奥を見きわめた上での、
常識を越えた、屈折した意識を持つ特異な天才的作家でなければ、
幸福な輝かしい、例えば華やかな紅の像をさらに超えて、悲境に沈
む、例えば鈍色の像に究極の美を見出すことなど考えも及ばなかつ
たであらう。

作者がこのように、定子注10の美を、ひたすら中関白家の盛時の、幸
福な輝くばかりの容貌と約爛とした衣裳によつてのみ描き上げたの
と軌を一にして、逆境における定子も、この理想像にあわせて、そ
れに副う、あくまでも明るくはなやいだ面のみをとり上げ、暗く悲
しく哀れな面にはふれることをしなかつたのではないか。

定子をただ一途に讃仰し敬慕してやまなかつた少納言としてはそ
れは当然のことであつたように思われるのである。(53・9・20)

枕草子回想段について 一定子の美をとおして一

注

1 「枕草子 紫式部日記」日本古典文学大系(岩波書店 昭和33
・9)所収の、「枕草子年表」ならびに、各段の頭注による。

2 「榮花物語上」日本古典文学大系(岩波書店 昭和39・11)に
よる。「浦く」の別」の巻は「小右記」「百鍊抄」と異なるあ
る部分があると言われる。(上一六〇頁)

3 「枕草子」日本古典文学全集(小学館 昭和49・4)(底本、
能因本系統本の学習院大学蔵三條西家旧蔵本)によれば「宮は
白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる」とある。

4 注1の補注三四四頁

5 「凡天皇。為三本服二等以上親喪。服錫紵。謂凡人君即
唯有心喪。故云本服。其三后及皇太子。不得絶榜替。故
律除本服字也。依儀制令。子為二等。故稱三二以上。即
外祖父母亦同。……錫紵者。」(令義解 卷九喪葬令)

細布。即用淺墨染也。」(令義解 卷九喪葬令)
6 数字は用例数を示したもの。
7 「花の木ならぬは……白樗といふものは、……三位・二位のう
へのきぬ染むるをりばかりこそ、……素盞鳴尊出雲の国におは
しける御ことを思ひて、人丸がよみたる歌などを思ふに、いみ
じくあはれなり。」(八八・九頁)「九月廿日あまりのほど、
……夜ふけて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしども
が衣の上に、しろうてうつりなどしたりしこそ、いみじうあは
れとおおえしか。さやうなるをりぞ、人歌よむかし。(二五七
・八頁)

8 小著「平安朝文学の色相」(笠間書院 昭和42・9)所収「色

によるすがた、かたちをとおしてみた人物造型への一態度―源氏物語における―及び「墨染の美―源氏物語における―」に詳しい。

9 注8の小著所収「色彩の対比的表現―枕草子における―」「色彩に対する一態度―枕草子における―」等の小論でふれている。

10 定子のみでなく、中関白家一族の、伊周（一八四段）道隆・隆円僧都・道雅・中姫君・御匣殿・三の御前（二七八段）貴子・淑景舎・道隆（一〇四段）の、定子も描かれている同じ盛時の段の描写はもとより、さらに、伊周（二三段）道隆（三五段）道隆（一二九段）伊周（三一二段）などの段にもその容姿が描かれ、これらの段も、一族盛時の場面が記され、これらの人々のはなやかな服色による美しさが示されている。つまり、一族の人達についても栄花物語に描かれている伊周の喪服姿など、まったくかけも見ることができない程、定子への態度と同様、最盛時のはなやかな容姿の描写に終始しているのである。

小稿が據った文献は、「枕草子」は注1と同書、「栄花物語」は注2と同書、「源氏物語」は日本古典文学大系本。引用文中に、――、――、等、等の傍に記したものは、稿者による。